

離島・へき地をフィールドとした教育プログラムの効果

一看護実践能力を高めるための卒後教育への取り組み—

春田陽子¹⁾, 金子美千代²⁾, 丹羽さよ子³⁾, 久松美佐子³⁾, 堤由美子³⁾, 木佐貫彰³⁾

要旨

我々は、2015年から「地域での暮らしを最期まで支える人材養成—離島・へき地をフィールドとした教育プログラム—」を行っている。本研究は、履修生の臨床現場での看護実践に本教育プログラムがどのような効果をもたらしたかを分析し、本教育プログラムの有用性を検討する。アドバンスコースを履修している急性期病院に勤務する看護師1名を対象に、実習終了後のレポートとeポートフォリオからデータを抽出し分析した。その結果、対象が独自の背景を有する「生活者」であること、看護師の倫理的感性が密接に関係していること、看護実践を振り返り自己洞察することの重要性について学んでいた。以上より、本教育プログラムは、地域での暮らしを最期まで支える看護職に必要な能力を発展させていく上で有用であることが示唆された。

キーワード：在宅看護，看護教育，倫理観，生活者としての対象理解

緒言

少子高齢社会を迎えているわが国では、地域包括ケアシステムの構築に向けて住み慣れた地域での暮らしを支える人材の育成は喫緊の課題である。病院から暮らしの場へ医療・看護をつなぐ教育を充実させて、看護師の専門性を強化していくことが求められている。本学の考案した「地域での暮らしを最期まで支える人材養成—離島・へき地をフィールドとした教育プログラム—」（以下、本教育プログラム）は、文部科学省課題解決型高度人材養成プログラムに採択された。本教育プログラムは、「離島・へき地をフィールドとした教育」を特徴としている¹⁾。多くの離島では医師が常駐しておらず、看護職が医療・ケアを担わざるを得ない現状がある。そのため、限られた医療資源や環境の中で自己の看護提供に責任をもち、適切な医療・看護を実践する能力や、倫理観や判断力など看護職としての資質など、必要な能力が育成できやすいフィールドとあると言える。さらに、離島・へき地で学ぶことで地域独自の多様な文化（価値

観・生活様式・風土）に触れ、人々の暮らしの中に入る体験を通して、生活の延長線上に医療（生きるための治療）があることを体感し、対象が独自の背景を有する「生活者」であるということをより明確に実感して捉える体験ができると考えたからである。

そこで、本研究では、履修生の臨床現場での看護実践に本教育プログラムがどのような効果をもたらしたかを分析し、本教育プログラムの有用性を検討する。

本教育プログラムの概要（図1）

- 1) 本学の学部生を対象とした「ベーシックコース」と臨床経験3年以上の看護職（社会人）を対象とした「アドバンスコース」がある。本研究では、3年間で地域での暮らしを最期まで支えることができる能力の修得を目指す「アドバンスコース」について主に概要を示す。
- 2) 本教育プログラムは、「離島・へき地をフィールドとした教育」によって地域での暮らしを最期まで支え

¹⁾ 元鹿児島大学医学部島嶼・地域ナース育成センター

²⁾ 鹿児島大学医学部島嶼・地域ナース育成センター

³⁾ 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻地域包括看護学講座
連絡先：丹羽さよ子

鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax: 099-275-6751

E-mail: n-sayo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

地域での暮らしを最期まで支える人材養成—離島・へき地をフィールドとした教育プログラム—

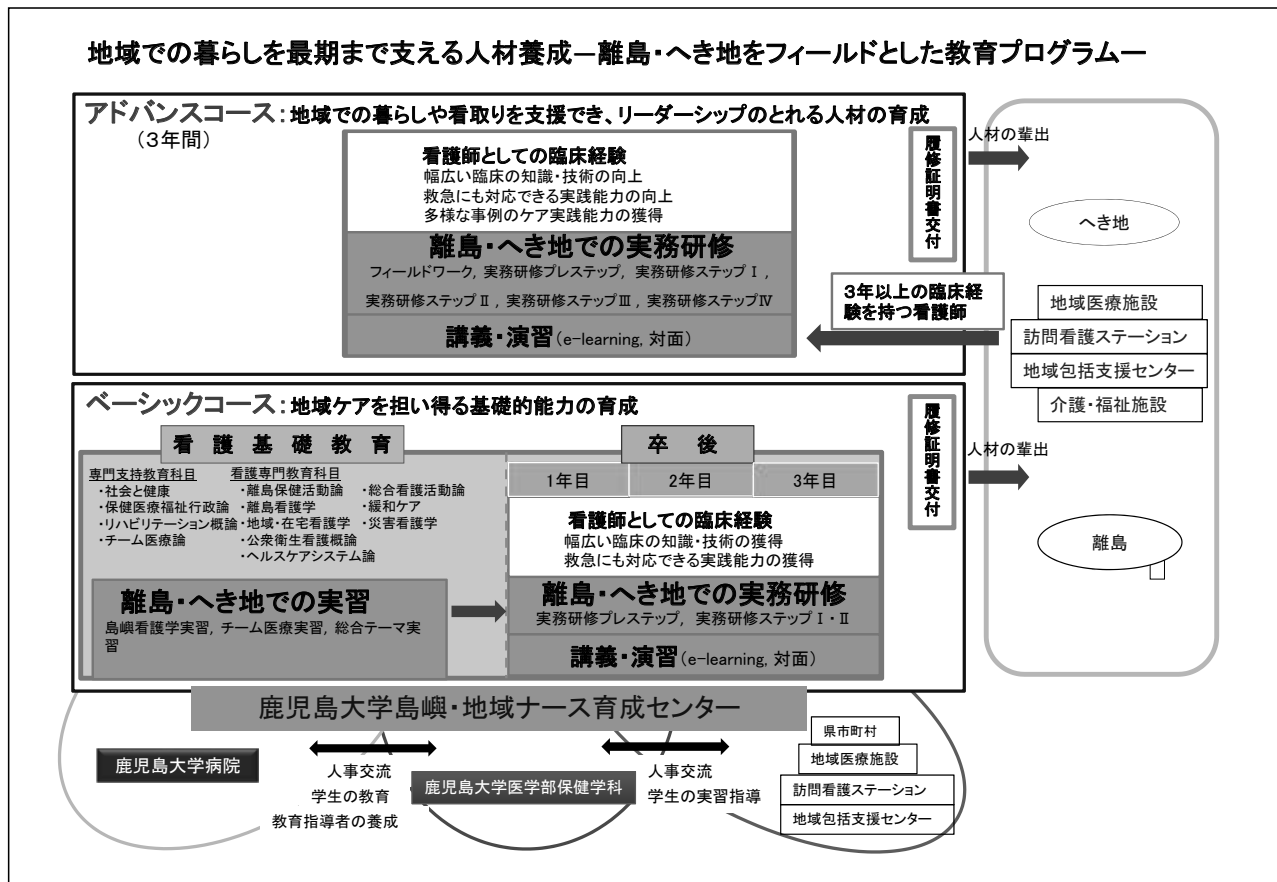


図1 本教育プログラムの全体像

ることができる人材を育成するものである。

- 3) 地域での暮らしを支える看護職に必要な能力として「その人らしさを尊重する能力」「地域の資源やサービスをつなぐ能力」「専門職として自己研鑽する能力」を設定した。これらの能力を育成するために、対象を「生活者」として捉え、「その人らしさを尊重する視点」をしっかりと持ってもらうことを核としたカリキュラムである（図2）。これは、看護実践能力は、看護過程の展開において、看護上の意味を見出す看護者自身の認識の仕方に大きく依存しており、対象を「患者」と捉えるか「生活者」と捉えるのかによって、看護過程の展開の仕方が大きく変わるからである。また、多様な価値観・信条を尊重して、その人らしい意思決定を支援するためにも看護者自身の倫理的感性が密接に関わってくるからである。
- 4) 学習支援体制
 - (1) 履修生は病院などで働きながら受講するため、必要な知識・理論を自宅でも受講できるようにeラーニング、eポートフォリオなどのICTを活用した。また、履修生の経験の再構築を促すための「リフレクシ

ン」を職場や自宅、離島・へき地など遠隔地にいながらもタイムリーに実施できるようにweb面談システムを活用した。

- (2) eポートフォリオとは、個人の学習プロセスを可視化し、自己の学習課題や描いたゴールに照らし合わせて学びやその過程を自己評価することにより、今後の学びに生かすことができるようにするものである。「自己学習目標の設定と評価」「講義、実習のふりかえり」を通じて、履修生の目標達成度や臨床の現場での看護についても把握することができる。
- (3) アドバンスコースの実務研修と育成する能力との関係（図3）
 - ①離島・へき地フィールドワーク実習（実習期間4日間）

本実習は、対象を生活者としてとらえる能力を鍛えるためのものである。
 - ②実務研修プレステップ（実習期間3日間）

本実習は、訪問看護師のシャドーイングにより在宅看護過程を追体験する実習である。

シャドーイング用のプロセスレコードを使って、履修生自身が在宅看護過程を展開できるための基礎的な“あ

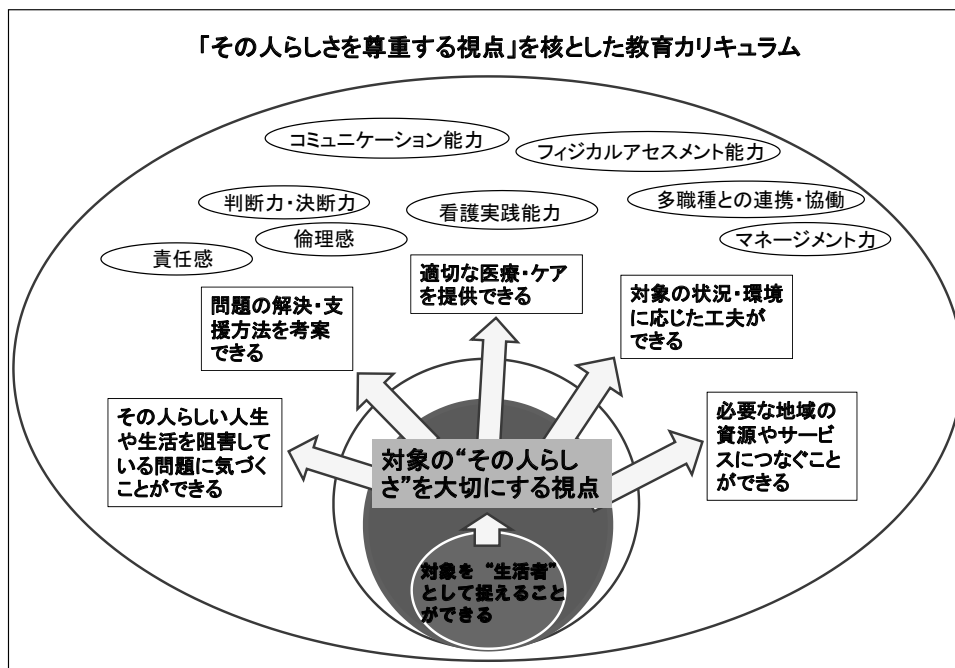


図2 その人らしさを尊重する視点を核とした教育カリキュラム

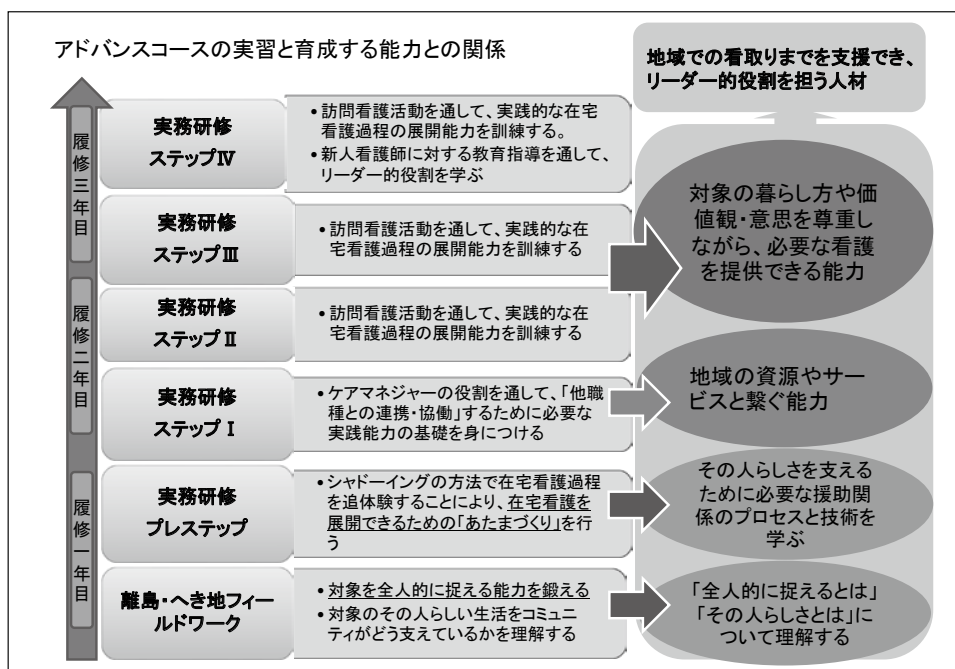


図3 アドバンスコースの実習と育成する能力との関係

たまづくり”を行うためのものである。

③実務研修ステップⅠ（実習期間3日間）

本実習は、ケアマネジャーとの同行訪問により、対象の望む生活を実現するために多職種と協働する能力の基礎を身につけるためのものである。

④実務研修ステップⅡ～Ⅳ（各実習期間3～4日間）

本実習は、対象の暮らしや価値観・思いを尊重しながら必要な看護を提供する実践的な在宅看護過程の展開能力を訓練するものである。

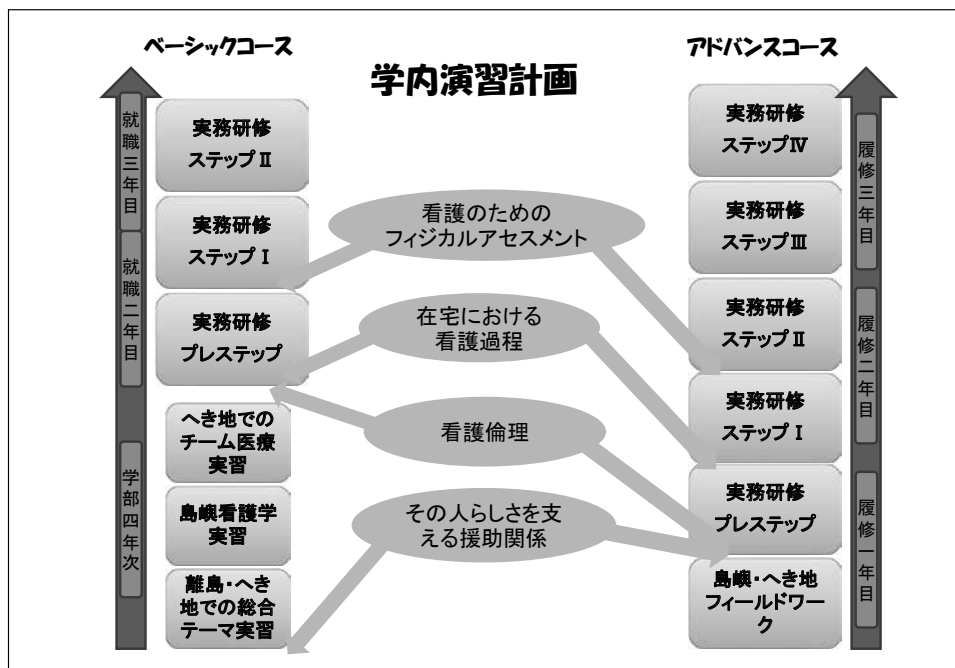


図4 学内演習計画

(4) 学内演習

在宅看護に必要な能力を補強するために学内演習を計画した(図4)。

①演習「その人らしさを支える援助関係」および「看護倫理」

本演習は、自身が日常において無意識のうちに行っている判断の仕方について洞察し、対象の自律を保障する倫理的な看護実践能力を高めるためのものである。

②演習「在宅における看護過程」

本演習は、疾患を中心とした問題解決思考のみではなく、療養者・家族の意向を尊重し、生活の質の向上も視野に入れた目標達成志向での援助法が導き出せる能力を身につけるためのものである。

③演習「看護のためのフィジカルアセスメント」

本演習は、心身の異常や変化に気づき何が起きているのかを正しく推論し、正しく聞き取り、正しく伝え、異常時には迅速な判断ができると同時に、数値だけの判断ではなく生活への影響をアセスメントし、療養者と家族の望む医療や生活を支援できる能力を身につけるためのものである。

研究方法

1. 研究デザイン

事例研究

2. 研究対象

本教育プログラムのアドバンスコースを履修している急性期病院に勤務する看護師1名を対象とした。本研究対象は、実務研修である「離島・へき地フィールドワーク実習」「実務研修プレステップ」「実務研修ステップI」および演習である「その人らしさを支える援助関係」「看護倫理」「在宅における看護過程」までを終了している。

3. 研究期間

2015年5月～2019年3月

4. 分析データ

「離島・へき地フィールドワーク実習」「実務研修プレステップ」「実務研修ステップI」の実習終了後レポートとeポートフォリオのふりかえりの記述内容。

5. 分析方法

- 1) 各実習終了後の3つのレポートの記述内容から、学びを意味していると考えられるデータを抽出し質的帰納的に分析した。なお、分析結果の厳密性を高めるために、質的研究の経験者2名に確認をもらった。
- 2) eポートフォリオの記述内容から臨床現場での事例について取り出しプロセスをまとめた。その記述内容から症例検討シートによる「医学的適応」「患者の意向」「QOL」「周囲の状況」の4つの項目に関連する情報を抽出し履修生の倫理的視点を分析した。

表1 離島・へき地フィールドワークを通しての学び

カテゴリ	サブカテゴリ	ラベル	具体的記述内容
その人らしさにはその人の価値観や思いが強く影響している	その人の価値観が生み出すその人らしさ	健康教室での知識を生活へ活用する	健康教室で得た知識を得ることで生活に生かしていた。
		自分の事は自分でするという力強さ	自分のできることは自分でしたいという思いが強かった。
		その人の価値判断による行動がその人らしさ	今までの人生の中でその人が大切に思い、価値判断の基準としてきたことやそれに基づいて行ってきた行動がその人らしさである。
		言動の根底の価値観を知る	言動の根底には必ず、その人が大切にしている価値観があるはずである。
		言動の背景を考慮することが対象理解となる	対象を理解するためには、その人が発している言動そのものだけに注目するのではなく、その言葉の裏にある思いや行動をするに至った思いを考えることが必要だと分かった。
		言動の裏の大切にしているものを理解する大切さ	表に出ている言動がその人のすべてではなく、その言動の裏にあるその人にとっての大切なものを理解することが対象を理解することである。
		自分の価値観で行動変容を促していたことの気づき	対象と関わる際に自分の価値観で判断していて理解できない言動だなと思い、疾病管理のためにはその行動を変えてもらわないといけないと思って接していた。
		行動の背景を考え対象を理解する必要	対象と関わるときは常になぜそういう言葉を言われたのか、なぜその行動をとったのか、と考える習慣をつけていく必要がある。
		対象の強みを知り活かす支援の大切さ	その中(対象の言動のなか)で対象の強みは何か、その強みを活かす方法を対象と共に考えていけるようにしたい。
		地域へ貢献する役割意識からのその人らしさ	それを(健康教室で得た知識)人に役立てることが自己の誇りとなっていた。
その人らしさはコミュニティに支えられコミュニティの価値観・規範に影響を受けている	近隣の理解・協力による生活の支え合い	文化や絆を守りたい	地域の文化や絆を守りたいという思いがある。
		近隣の理解と協力による力を発揮	互いのことをよく知っており、その人の最大の力を発揮できるように互いに協力していた。
	地域の文化がその人の判断の規範となっている	近隣との物のやり取り	近所の人と互いの家を行き来し、料理や野菜を分け合っていた。
		地域の習慣を大切にし意思決定の規範とする	家族や地域の人の言葉や大切にしてきた習慣を大切に思い、自分の行動や意思決定の規範にしているということがわかった。
		地域の価値観が自己の規範となり文化である	家族や地域の人が当たり前に思っている価値観やいつも行っている習慣は無意識のうちに自分の判断の規範や行動の規範となっており、それが文化である。
		知識獲得の場によるその人らしい生活の支え	知識獲得の場もその人らしい生活を支えるものである。
		地域の人々や資源を知ること対象を理解	対象を理解するためには対象の周囲の人々や地域の持ちうる資源も知ることも必要である。
		経験や地域・文化を知ること対象を理解	今までの人生の経験やその人の暮らしている地域・文化を知っていくことが必要である。

6. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、対象者に対し研究の目的・内容について研究への参加の自由と拒否による不利益はないこと、個人情報保護について口頭で説明し同意を得た。本研究に使用したデータは個人が特定されないように匿名化した。尚、本研究は本学疫学研究等倫理委員会にて承認を得て実施した。

結果

1. 実習での学び

以下に、「離島・へき地フィールドワーク」「実務研修

プレステップ」「実務研修ステップⅠ」での学びについて説明する。なお、カテゴリを【】、サブカテゴリを《》、記述内容を「」を用いて表す。

1) 離島・へき地フィールドワーク実習による学びとして4個のサブカテゴリと2個のカテゴリが抽出された(表1)。

離島・へき地フィールドワーク実習は、“その人らしさとは何か”を熟考する機会となり、「今までの人生の中でその人が大切に思い、価値判断の基準としてきたことやそれに基づいて行ってきた行動がその人らしさである」という《その人の価値観が生み出すその人らしさ》

や「地域の文化や絆を守りたいという思いがある」の《地域へ貢献する役割意識からのその人らしさ》など、【その人らしさにはその人の価値観や思いが強く影響している】ことを学んでいた。

また、地域独自の文化を知ることで《地域の文化がその人の判断の規範となっている》という気づきがあり、《近隣理解・協力による生活の支え合い》によるコミュニティの持つ強みを理解し、地域に支えられて地域によって作られるその人らしさを理解していた。「家族や地域の人が当たり前に思っている価値観やいつも行っている習慣は無意識のうちに自分の判断や規範となっており、それが文化である」と記述がみられ、【その人らしさはコミュニティに支えられコミュニティの価値観・規範・信条に影響を受けている】ことを学んでいた。

2) 実務研修プレステップによる学びとして7個のサブカテゴリと3個のカテゴリが抽出された(表2)。

実務研修プレステップでは、《もやもやしたことを言語化し他者と検討する必要性》に気づき、《対象者の尊厳を守る看護職としての態度》について自身の今までの態度を猛省する機会となっていた。そして、【対象の尊厳を守るためには看護師の倫理的感性が密接に関係しているという学び】を得ていた。

また、訪問看護師の看護場面を通して「看護師の捉え方による看護の違い」があるという体験から、自身の看護に《医療的視点への偏りの気づき》があること、これまでは《無意識に看護過程を展開》していたと自覚し《自己の実施した看護を振り返る必要性》に気づき、【その人らしさを支えるために必要な看護過程】として《その人の生活に即した看護を展開する必要性》があることを学んでいた。

さらに、《自らの言動が他者に及ぼす影響を自己洞察することの必要性》《対象理解のための自己活用の方法》など【自己の看護過程を客観的に評価することの重要性】について学んでいた。

3) 実務研修ステップIによる学びとして、6個のサブカテゴリと2個のカテゴリが抽出された(表3)。

実務研修ステップIでは、対象の多様なニーズに対応するためには、「多職種との関わりが必要である」ため、まずは《他職種を尊重した視点》をもつことが大切である。専門性によって状況認識や判断に違いが生じることもあるため《他職種と協働するために必要な言語化する能力》の必要性を認識し、その人らしさを支援するためには、【多職種と連携協働することの重要性】を学んでいた。

また、療養生活を継続するためには《生活を重視した目標達成志向での看護を展開していく必要性》や《医療的視点から生活を重視し、地域へ繋いでいく必要性》を

学んでいた。履修生は、これまでの看護を振り返り「無理・できないではなくどうすればできるかを考え、目標に近づけるようにどのようなサポートが必要かという視点をもつことが大切だ」と記述しており、対象の持てる力を引き出す目標を共有し、【医療と生活を統合して捉える視点】について学んでいた。

2. 臨床現場での看護実践

1) 事例紹介

Aさん、80代男性、心不全(本人へ病状、予後が告知されていない事例)。

娘さんの希望により、Aさんは今の病状や残された時間が短くなってきていることを知らないままだった。これまで履修生は、患者本人に告知をせずに看取することは本人の気力を失わせることになるから伝えなくてもいいのではないかと、その理由や背景を検討せずに医療者の価値観だけで判断していた。

2) 看護実践内容

履修生は「このまま本人に伝えないでいいのだろうか?」と日常の看護の中でモヤモヤを抱くようになり、Aさんの自律尊重が守られていないのではないかと倫理的ジレンマを感じるようになった。そこで、Aさんのこれまで自分のことは自分で決めてきたという背景を考え、Aさんに病状を伝えたほうがいいのかという思いをまずはスタッフに相談し、主治医の意向を確認することにした。主治医も本人に伝えたほうがいいのかという同じ思いだった。そして、娘さんたちに医療者側の意見を話した。娘さんたちがなぜ知らせたくないと考えているのか、娘さんたちの思いを確認した。娘さんたちは告知することで本人が受け止められないのではないかと不安を抱えていることを確認することができた。その後、家族間でも話し合いを行い検討した結果、本人の精神的負担を考慮し、直接的な表現は避けて説明するということになり、Aさんをまじえて今後について主治医から説明を行った。医師からの説明後に療養先について確認すると、転院はせずにここでの治療を希望された。そして、履修生は本人の希望通りの環境とは何か、本人の思い描く療養生活とはどのようなものかと、本人の思いを引き出しながらどうすべきか考えていった。外の空気を吸いたいという希望に、主治医に本人の思いを伝え、家族と共に院内に散歩にいった。Aさんは「気持ちがいいね。また外に出たい。誰がこんなことを考えたの」と笑顔で話された。家族の方より、畑を気にしていること、よくなったら自宅近くに転院したいという思いを聞き、少しでも家に帰れる時間を作ることはできないのか、療養場所について検討していった。病状がよくなるという

表2 実務研修プレステップを通しての学び

カテゴリ	サブカテゴリ	ラベル	具体的記述内容
対象の尊厳を守るためには看護師の倫理的感性が密接に関係しているという学び	もやもやしたことを言語化し他者と検討する必要性	カンファレンスによる偏った考えの修正	4分割を活用しながら一人で考えるのではなく、カンファレンスをする事で偏った考えではなく、検討することができると思った。
		カンファレンスによる倫理的思考の学び	カンファレンスをする事で他者の思考も知ることができ、自己に不足している倫理的思考に気づくこともできると思う。
		もやもやを言語化し様々な視点で分析する必要	対象と関わる中で、自己のモヤモヤを他者に話すことはあってもそれを言語化し、さまざまな視点から分析し対象にとってよいことは何かというカンファレンスを自ら実践することはほぼなかった。
		言語化、分析による視点の広がり	今回自分のモヤモヤを4分割を使用して言語化、分析することで起こっている事象を様々な視点から考えることができた。
その人らしさを支えるために必要な看護過程	対象者の尊厳を守る看護職としての態度	対象の尊厳について軽視してきたという気づき	認知機能が低下した患者に対して治療の選択をする際に医師からの説明は家族から行われ、家族によって治療が選択されていることが当たり前のようになされており、自己のなかでもそれを当たり前のように受け止めてしまっていた。
		本人の尊厳が反映されていなかったという気づき	いかに患者本人の知る権利や選択について無視していたかということに気づかされた。
		対象の権利を守る必要	対象の知る権利や選択の権利、尊厳が守られているかと考える思考が常になければならない。
		看護者の捉え方による看護の違い	指導者の思考過程と言動を知ること看護者の考える内容で看護が全く異なるということを実感した。
	自己の実施した看護を振り返る必要性	生活に即したアセスメントの必要性	生活を支えるためには、看護者が生活者としてとらえ生活を知らうとし生活に即したアセスメントをしなければならない。
		看護を意味づけする重要性	後輩と振り返りをするときも、行動だけでなく、どうしてそうしてしまったのか思考と一緒に振り返ってみたいと思う。
		無意識に看護過程を展開	意識をせずに、看護をしていると思った。無意識に様々な思考が働いており、それがひとつひとつの言動になっている。
		自己の看護を分析する必要	なぜ自分の看護がうまくいかなかったのか？と落ち込むことはあってもそれを分析することはせずにいた。
	医療的視点への偏りの気づき	自己の思考過程が医学に偏っていたという気づき	自分の思考がとても医学に偏っていたと気づかされた。
		病気に関連した情報収集とアセスメント	対象を病む人と捉え、抱える病気に意識が向いていれば、看護者は病気に関することを対象に尋ね、アセスメントもすべて病気との関連を考えてしまう。
		疾患を主とした看護過程の展開	アセスメントしたことから、看護を行うため、必然的に病気についてのケアばかりになってしまう。
		対象の思いを詳しく理解しようとする必要	対象の思いを詳しく知ろう、自分の捉えた対象の思いと本当の対象の思いがずれていないか確認しようということができていなかったということにも気付いた。それは対象の尊厳を尊重しない看護に繋がる自己の傾向だと思った。
自己の看護過程を客観的に評価することの重要性	対象理解のための自己活用の方法	思いを引き出す思考過程の学び	ひとつひとつの言動とそれを導き出す思考過程を詳しく考えることで自分の看護を振り返るいい機会になった。
		無意識の行動を表面化することでよい看護につながるだろうという学び	無意識の行動を分析して、言語化することは精神的に負担になることもあるが、今後はふりかえりをして、よい看護につなげたいと思う。
	自らの言動が他者に及ぼす影響を自己洞察することの必要性	看護過程を客観的に分析する	自己の看護や思考を客観的に分析することで、対象にとってよい看護になったか、ならなかったかその原因はなんだったかを知ることができる。
		自己洞察することの意義	自分の傾向を知り、それがよい看護の妨げになるところがあればそれを正すことができる。
		よい看護につなげるためには客観的に分析・評価することの必要性	ひとつひとつの看護を客観的に分析・評価することは次のよい看護につなげるために重要だと考える。

表3 実務研修ステップⅠを通しての学び

カテゴリ	サブカテゴリ	ラベル	具体的記述内容
多職種と連携協働することの重要性	多職種が協働するために必要な他職種を尊重した視点	職種間の専門性を理解する必要性	多職種と連携し調整するためには、それぞれの職種の専門性について理解することが必要だと感じた。
		対象のニーズを満たすためには看護師だけでは不十分である	看護師は対象のニーズに気づくことができて、すべてのことを一人で対応できるわけではない。
		対象を取り巻く多職種との関わりによってニーズが満たされる	対象のニーズを満たすためには、様々なアプローチが必要であり、それを可能にするためには多職種との関わりが必要である。
	他職種と協働するために必要な言語化する能力	看護師に必要な生活を予測する視点	看護師が対象に関心を寄せ、在宅で困るのではということに気づかなければ、次に繋がらないということに気づかされた。
		他職種が理解できる言葉で伝える力	他職種へどうすれば伝わるかということを考え、より具体的に共通の言語を探して伝えていくことが必要だと思った。
	ケア時に必要な観察視点を共有する必要性	社会資源についての情報提供の必要性	対象は社会資源について知識がなく、在宅で困っていてもそれをどう解決していいかわからないことも多い。
医療と生活を統合して捉える視点	看護師に必要な環境を整えるという視点	介護職へ理解してもらうためのわかりやすい説明の方法	介護職の方には疾病に関しては具体的にどういうことに、なぜ気をつけてほしいのかということを伝えることが必要だと思った。
		ケアマネジャーが体験した困難事例からの学び	ケアマネジャーから病院から在宅に戻る際、在宅での生活が成り立たず焦って相談が来る話がある話を伺った。
		看護師に必要な環境を整えるという視点	自己の病棟で退院支援カンファレンスを行っているが、入院前はどのようなADLでどういう生活をしていたという情報や、自宅の環境やその中で対象が生活するためにはどのようなサポートが必要かという検討が十分にできていないことがあることに気づいた。
	生活重視した目標達成志向での看護を展開していく必要性	対象の視点に立った目標立案の必要	ケアマネジャーは目標が現状とかけ離れていたとしても、それに近づけるようにその最終目標に向かって、実現可能な短期目標を積み重ねていた。
		対象の強みを活用した目標	目標達成を阻害しているものはなにか、その阻害しているものを解決するために使える資源は何か、フォーマルはもちろん、インフォーマルも含めて考え、対象の強みは何か、どうすれば目標達成できるか考えていた。
		どうすれば目標に近づけるか現状と望ましい状態とのバランス考える視点の大切さ	無理・できないではなくどうすればできるかを考え、目標に近づけるようにどのようなサポートが必要かという視点を持つことが大切だと思った。
	医療的視点から生活を重視し地域へ繋いでいく必要性	看護師に必要な時間軸で対象を捉えるという視点	入院中の対象しか見えておらず、入院前・入院中の状況・退院後の生活を連続してみることやイメージすることができていなかった。
		看護師に必要な他職種につなげるため言語化する力	病院の看護師は疾病や入院中のことだけに心がいてしまっているが、生活についてももっと細かく知り、サポートの方向性を他者へ伝えていく能力が必要だと思った。

ことに對しAさんが氣落ちする姿もあった。Aさんの病氣に負けたくない気持ち、妻のいる家に帰りたいとAさんの本当の思いを履修生は感じていた。「ビールが飲みたい」という本人の願ひも主治医や病棟師長に相談し、娘さんに刺身やビールを準備していただき、Aさんと家族で一緒に食べていただいた。家に帰りたいという思ひは叶えることができなかったが「また外に出たい」といつていたAさんの願ひを主治医に相談し、酸素チューブや点滴をつけながら看護師3名でご家族と付き添い外出をし、そのときの写真を最期にご家族へプレゼントした。

考察

1. 履修生の認識の変化

履修生のレポートの中で、自らの看護をふりかえり「自分の価値観で判断していた」「無意識にさまざまな思考が働いていた」という自らのバイアスへの気づきによる記述がみられた。バイアスとは端的に言えば人が経験則によって持つものの見方・考え方の“偏り”である。入倉²⁾はバイアスに基づくスピーディーな意思決定はたいてい間違っていないし、日常生活を円滑に進める上では欠かせないものであるが、時に過去の経験に基づく推論が正しい意思決定を邪魔することがあると指摘してい

る。そして、それらの多くは本人が認識しないまま、つまり“無意識”の状態で発動すると述べている。濱口³⁾は、特に専門職では、その領域でさまざまな意思決定をするが、それが成功したり失敗したりという経験を積み重ねた結果、問題解決のための思考パターンができあがると説明している。そして、目の前に意思決定すべきことがあるとき、かつて成功したケースを適用しようとするバイアスが働くため、ここには、新しいアイデアや発想の入り込む隙がないと指摘している。つまり、経験を通して得た価値判断によって看護を実践することは、パターン化された関わりとなり、「その人らしさ」ととらえた関わりが阻害される。さらに、治療が最優先の病院という環境では、患者・家族の「生活」を理解することは物理的に難しい⁴⁾。しかし、履修生は離島・へき地フィールドワーク実習による「対象のその人らしさを理解し、対象を生活者として捉えることの大切さ」を学ぶ体験を経て、“生活者”として捉える能力が鍛えられた。そして、自らの看護を構造的に振り返ることで《医療的視点への偏りの気づき》により、履修生が無意識に持っているバイアスの存在が明らかとなった。さらに、「入院中の対象しか見えておらず、入院前・入院中の状況・退院後の生活を連続してみることやイメージすることができていなかった」とし、その人の生活へと関心が広がり、【医療と生活を統合して捉える視点】へと変化していったと考える。

2. 倫理観に基づく看護実践への発展

渕本らは、倫理的問題を検討するためには、正しいと考える結論ではなくその結論に至るまでのプロセスを重視する必要がある⁵⁾と述べている。また、臨床の現場ではただちに判断しなければならない場面が多くあり、多くの臨床看護師は、目の前の問題を解決するためにすぐに結論を出すようにトレーニングされている。患者さんを観察し、問題があればその対応をすぐに判断しなければ患者さんが不利益を被るからである⁶⁾。それに加え、非日常的な医療の現場では道徳観を混乱させたり麻痺させてしまうところがあるため、倫理的問題にも気づきにくくなってしまうのではないかと考える。すなわち、これらのことが習慣化し倫理的問題に対しても無意識のうちに直感的な判断をしてしまっているのである。

しかし、履修生は「本人に伝えないままでいいのか？」と《もやもやしたことを言語化し他者と検討》したことで倫理的問題として表面化した。そして、履修生はAさんが最期の時間をどう過ごしたいと考えているのか、「対象の思いを詳しく理解しようとする必要」があると考えた。そして、Aさんの意思や気持ちに配慮しながら、なにがAさんにとって“最善”であるかを多職種と検

討していった。つまり、履修生はAさんの自律尊重が阻害されていると考え【対象者の尊厳を守る看護職としての態度】へと変化していたのである。しかし、一方で家族の意向により、Aさんには予後について本当のことが知らされていない状況があった。Aさんの予後が悪いことを伝えるとしても、伝えることによるAさんの精神的負担を与えることも考えられた。Aさんの持てる力を引き出すために《その人の生活に即した看護を展開する必要性》があると考え、家族を含め多職種と検討していった。

このように履修生は「起こっている事象をさまざまな視点から分析」し、【その人らしさを支えるために必要な看護過程】を再考しながら「対象を取り巻く多職種との関わり」によって、Aさんのその人らしさを導きだす支援が実践できたと考える。

3. 看護観の再構築

その人らしさを導きだす看護実践ができたのは、図5の学習支援体制にあるゴールへ向かう学習プロセスにあったのではないかと考える。講義や演習で得た知識・理論をつかって論理的に考える力が身につく自らの看護実践に活かすことができた。履修生は、「悪い知らせを伝えるのをためらうのは、患者のことを思ってではなく、その後の患者を支える自信が自分がないから」とリフレクションを通して気づき、観念的な学びではなく自己を深く洞察する中で、患者さんへ一歩踏み込めなかったのは自分自身の要因であったのではないかとふりかえることができた。そして、自分と向き合い「患者が病状を告知された後にどのような精神状態になっても受け止めて、支えようという覚悟をもって関わる」と看護に責任を持つとする強い意志が芽生えた。さらに、この看護体験を通して、「これからも患者のために何が最善かを考え、どういう結果になろうとも受けいれる覚悟をもちたい」という思いが履修生に根付いたものとなった。

このような成長を遂げていくプロセスは、本教育プログラムを通して自分の経験を意味づけ、日々の実践をより深く考えながら看護師としての姿勢をより確かなものにしていったものといえる。

結論

履修生のレポートの記述内容を質的帰納的に分析した結果、本教育プログラムによる学びとして、以下のことが明らかになった。

1. 離島・へき地フィールドワーク実習では【その人らしさにはその人の価値観や思いが強く影響している】【その人らしさはコミュニティに支えられコミュニティの価値観・規範・信条に影響を受けている】につ

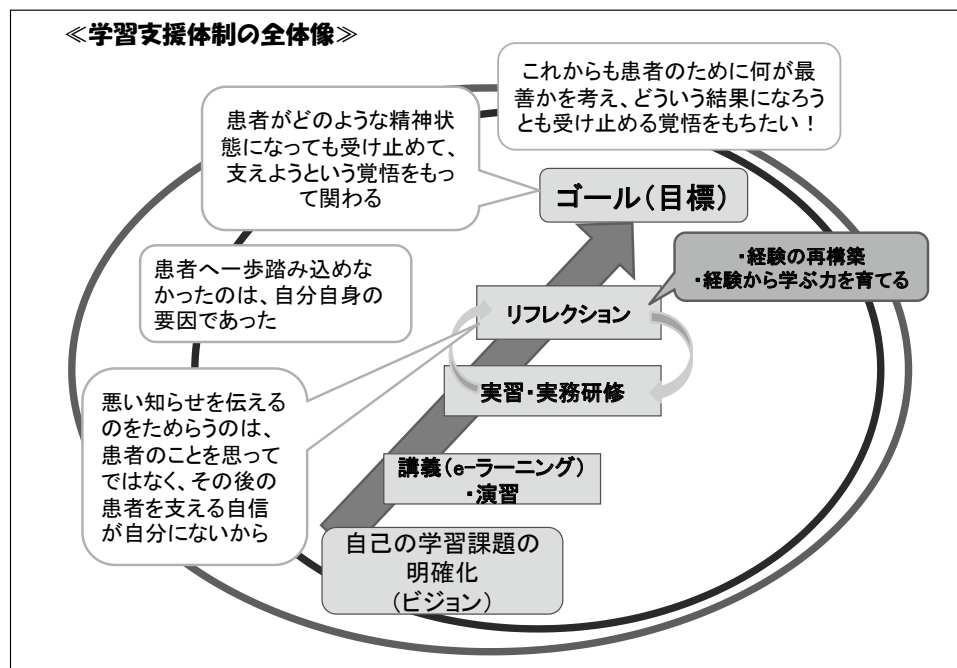


図5 学習支援体制の全体像

いて学ぶことができた。その際に、自己の「無意識のバイアス」や医療的視点への偏りが「その人らしさ」ととらえる視点を阻害していたことに気づき、対象が独自の背景を有する「生活者」であるという視点を修得することができた。

2. 実務研修プレステップでは【対象の尊厳を守るためには看護師の倫理的感性が密接に関係しているという学び】と【自己の看護過程を客観的に評価することの重要性】について学ぶことができた。
3. 実務研修ステップⅠでは【多職種と連携協働することの重要性】【医療と生活を統合して捉える視点】について学ぶことができた。

以上の学びにより、履修生は、臨床現場において担当していた患者の倫理的問題に気付くことができ、その後、その患者にとっての「最善」を家族と一緒に考え、患者のその人らしさを導き出す支援を多職種と連携協働することにより実践できた。

このことから、本教育プログラムは、地域での暮らしを最期まで支える看護職に必要な能力を発展させていく上で有用であることが示唆された。

本研究の限界と今後の課題

本研究結果は一事例の研究であるため、一般化は困難である。今後は、対象数を増やし、さらに検討していく必要がある。

文献

- 1) 公益社団法人日本看護協会：平成27年版看護白書，2015, P29-38
- 2) 入倉由紀子：組織を蝕む無意識のバイアス，Works, No.150, 2018, P5
- 3) 前掲著2)，P28
- 4) 小林悦子：「生活を支える看護」7つのポイントより良い療養支援のために生活を支える看護を考える，コミュニティケア，11月臨時増刊号，2016, P5
- 5) 測本雅昭，神田直樹：カンファレンスで根付かせる看護倫理現場導入の仕方，日総研出版，第1版，2012, P35
- 6) 前掲著5)，P36

Effects of an education program targeting remote islands and areas: Effort for post-graduate education to improve nursing skills

Yoko Haruta¹⁾, Michiyo Kaneko²⁾, Sayoko Niwa³⁾, Misako Hisamatsu³⁾, Yumiko Tsutsumi³⁾, Akira Kisanuki³⁾

1) A former member of the Medicine Education Center for Nurses on Remote Islands and in Remote Areas,
Kagoshima University Faculty of Medicine, 8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima, 890-8544 Japan

2) Kagoshima University Faculty of Medicine Education Center for Nurses on Remote Islands and in Remote
Areas, Japan

3) Kagoshima University Faculty of Medicine School of Health Sciences, Department of Nursing,
Comprehensive Community-based Nursing, Japan

Address correspondence to Sayoko Niwa,
E-mail: n-sayo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

We have been providing intervention for remote islands and areas based on an education program for human resource development to support all residents' community lives since 2015. The present study aimed to analyze the effects of the above-mentioned education program on students' nursing practice in clinical settings to examine its usefulness. The subject was a nurse of an acute care hospital who had taken the advanced course. Data were extracted from her report submitted following training and her e-portfolio and analyzed. The nurse learned that "care recipients living in the above-mentioned areas" have a unique background and that nursing care provided by nurses is closely associated with their ethical sensitivities, as well as the importance of reviewing their nursing practice and self-insight. The results of the study suggest that the education program is useful for nurses to develop skills required to support people who wish to continue to lead a community-based life.

Keywords: home nursing, Nursing education, sense of ethics, Understanding of patients as persons who implement daily-life activities.